

「R. H. Blyth 研究」中間報告

多 田 稔

真宗総合研究所の平成9年度一般研究の許諾を得て2人の研究者ノーマン・ワデルと多田稔がこの2年間に亘り行ってきた調査と研究の中間報告をそれぞれ以下にしたためたい。

レジナルド・ホレス・ブライス博士は第2次大戦後、学習院高等部の外国人教師を本職として、その他、東京大学をはじめ多くの東京地区の大学で教鞭を揮い、学習院関係者をはじめ日本の多くの知識人たちに様々な影響を与えた人である。就中、禅の外国人理解者、あるいは帰依者として多くの著述をはじめ禅書の英訳を行い、俳句を英語で紹介し、その後の俳句ブームに先鞭をつけた人であったが、その生前には人々にあまり知られた人物ではなかった。

この理由の一つは、理想像として彼が心酔していた当時の学習院長山梨勝之進との約束で、戦後ブライスが行った皇室関係の仕事や学習院存続運動等については彼が「黒子」に徹していたためである。またもう一つは、彼が信頼を寄せていた当時鎌倉松ヶ岡文庫にいた鈴木大拙による禅の教えによるものであったと言える。ブライスは戦前の日本統治下にあった京城帝大予科の英語教師をしていた頃、初めて禅に接し親しく手ほどきを受けた妙心寺別院の華山大義を別とすれば、鈴木大拙以外の禅者には本心を明かしていなかったとも言えよう。そして、大拙没年よりも2年も早く、まだ66才という志なかばで逝ったブライスの遺した蔵書はすべて松ヶ岡文庫に収納されたが、その後の大拙の死去のためもあって、現在一部整理されはしているもののまだ完全に日の目を見ていないためとも言えよう。大拙・ブライス両者からの大きな影響を受けたとその作品の中で公言しているアメリカの作家 J. D. サリンジャーなどからの献呈本も、そっくりそのまま、書庫に納められているのである。禅者の持つ矜持そのままに、こうした書物やあまたの事実が松ヶ岡にはつつまじやかに静かに眠っているのである。私たちが今回ブライス研究に着手し、幾つかの事実を明らかにしようと思ったのは次の理由からであった。その第一点は、ブライスという名前

が殆ど現代の人々の記憶から消えかけていると認識されること、そのため戦後すでに50年を経ているのでブライスの「黒子」のヴェールをあげてその素顔を紹介してもよいのではないかと判断したからである。私たちがこの研究に着手した時点での、ブライス没後に彼を紹介した主な論文や著書の数に極めて少なかった。宗片邦義、*R. H. Blyth Bibliography with Quotations*（静岡大教養部研究報告、1972）平川祐弘、『「人間宣言」の内と外—ブライス教授と山梨提督をめぐって—』（新潮社、1983）そして没後20年に当ってそれまでに世に出されていた記事に加えてブライスの訾訶に接していた、主として学習院の関係者による『回想のブライス』（回想のブライス刊行会、1984）など10点足らずのものであった。しかしながら、ブライス研究にとって画期的な集大成は1996刊行の吉村侑久代『R・H・ブライスの生涯 禅と俳句を愛して』（同朋社出版、1996、6、22）であろう。著者は英語俳句を愛し制作する縁から、俳句と禅に生きたブライス研究を根源までさかのぼり、ブライス近親者にインタビューしたり、且つて長らく日本に滞在し、日本滞在の後半では京都郊外長岡京市に住んでいた英国人詩人ジェームズ・カーカップが主宰する英国の俳句協会と接触し、ブライス生誕の地ロンドン郊外レイTONSTONを訪ね取材したりしている。またブライスの遺児お二人の内、日本に留まっている次女の武田ナナさんを大磯のブライス邸に訪ね、得られた様々の新知見を紹介している。この著作によってブライスの生涯についてこれまで断片的にしかわかっていなかったことがほぼ埋められたと言える。尤も、ブライスの京城時代の生活を直接知る同僚は現在では殆ど生存しておらず、その教え子たちも稀有な状況であるために、この著作においても、この期間のことは『回想のブライス』やブライス自身が付したその諸著作の序言などから推測せざるを得なかった。しかしここには、戦後直ちに学習院に奉職し、キリスト教の臭みのない東洋文化の心酔者で素朴な人柄と解されていたブライスが、当時の皇太子の家庭教師となり、且つ奇遇といってよいマッカーサー司令部に勤める『竹筆・俳句入門』の著者ハロルド・ヘンダーソン中佐と相知り、数名の日本通の将校たちとの交流により、戦後日本の中枢部において重要な役割を果たしたことも改めて明記されている。その年譜及びそれに付されたブライス生前の行動記録など極めて綿密に記されている。直接現地を訪問し、インタビューを行った新事実に基づいた貴重な一巻である。その中にはノーマン・ワデルを大谷大学の研究室に訪ね情報収集を行った記録もある。

また著者によれば、今回の最大の発見は、戦後間もなく日本占領の進駐軍むけに鈴木大拙と R. H. ブライスの編纂し自らも執筆して日本文化の本質を紹介した雑誌 *Cultural East* であるという。この雑誌は二号が刊行されただけですぐ廃刊となってしまったのであるが、この雑誌が世界中どこにも発見できなかったが松ヶ岡文庫の古田紹欽氏によって与えられたことを大へん感激して語っておられる。たしかにこの文庫には貴重な書物や雑誌があるのである。鈴木大拙と R. H. ブライスの著作物に関する限り、また両氏に寄せられた世界中の学者たちからの献呈本や書簡をも収容しているという点からしても、この松ヶ岡文庫はすばらしい資料館なのである。かつて多田は D. J. サリンジャーの研究のため、そして季刊『禅文化』に1985年から足かけ4年にわたり連載し、その後一巻にまとめた『仏教東漸—太平洋を渡った仏教』（1990）の資料確認のために、数日この書庫で過ごさせていただいたことがあるが、実はノーマン・ワデルはもっとこの文庫と近い関係にあるのだ。ノーマンの亡くなった近親者がこの文庫でかつて働いていた人であったのだから。今回の研究に当たっても、われわれは古田紹欽氏にお願いしてブライスの資料を種々見せていただいた。これら資料に付されたラベルの文字はすべてその方の筆跡を留めるものであった。このブライスを頼って来日したノーマンはその後、鈴木大拙の推挙により時の真宗大谷派の宗務総長・訓覇信雄によって大谷大学に職を奉じるに至り、また学内に置かれている *Eastern Buddhist* 協会のメンバーになったのである。ノーマンの最初の仕事は、戦後間もなく刊行された鈴木大拙『日本的靈性』の英訳であった。これはユネスコから刊行されている。

この『日本的靈性』こそは第二次世界大戦末期、すでに鎌倉東慶寺の一隅、松ヶ岡に移って空襲のたびに裏山の横穴の中に避難せざるをえなかった大拙が、戦後わが国の掘って立つべきものを「日本的靈性」と定め、国家主義・全体主義・国家神道でない日本の真の伝統と確信するものを提示したものであった。

こうした経緯をすべてふまえて今回の研究が始まったのである。松ヶ岡文庫の大拙及びブライス関連の書物と書簡に関する多田とワデルによる調査に次いで、コロンビア大学関連の知己の一人、バートン・ワトソン氏との面接調査、及び大磯在住のブライスの次女、武田ナナさんとの面談も行われた。幸運なことに多田の旧友の大磯在住の国谷医師は、昔からブライス家のホーム・ドクターであったので話は早かった。更に、ブライスの門弟第一号ともいべきハワ

イ在住のロバート・エイトケンを訪ねてのワデルによる聞きとりも行われたことであった。

しかしながら今回の調査研究のハイライトはブライスによって遺贈されたワデル研究室に集められている書簡、その他のブライスの書いたものに光を当てたことであろう。こうした資料にもとづいて *Annotated Bibliography of Writings*: Books, Essays, Uncollected Writings, Book Reviews, Translations, Letters, Miscellaneous Writings with Annotations Containing information about their content and circumstances of publication 及び前述のロバート・エイトケン、バートン・ワトソン、その他学習院関係の方々との面談等に基づいた *Annotated Chronology of Life of R. H. Blyth* が刊行され、ブライス研究が更に一步前進するものとわれわれは確信している。以下の英文はノーマン・ワデルによるその内容の一端である。本研究の中間報告として付記する次第である。